

第1回酷寒のシベリア鉄道の旅

NPO法人 JN 協会理事 近藤 節夫

昨年 12 月シベリア鉄道が、全線電化された。何を今ごろ？と不思議な感じにとらわれがちだが、大ロシアにとっては実に、1916 年全線開通以来の悲願達成なのだ。早速、厳冬の 3 月に全線 9,288km を走破してみた。途中イルクーツクで 1 泊したが、始発ウラジオストック駅から終着の首都モスクワ駅まで車中 6 泊の長〜い旅だった。一室 4 名のコンパートメントがわれわれ仲間 5 名の 6 昼夜の居住スペースだった。

最大の難問は、「ことば」だった。車両ごとに 2 人ずつ配置された女性車掌を始め、ロシア人乗客、食堂者のスタッフ、駅の係員、キオスクの売り子、行商のおばさんたちとの意思の疎通は、ロシア語とジェスチャー以外まるでダメだった。国際列車と銘打ちながら駅名や、車内の表示もすべてロシア語で書かれ、これほど外国人旅行客に気を遣わない国際列車も珍しい。だが、言葉の通じない中で、何とか手振り身振りで意思を伝えようとする私たちにとって、救いはたっぷりある時間と、一旦胸襟を開けばロシアの人々が皆親切であるということだった。いつもガラ空きの食堂車に入りぴたり、スタッフの温かいもてなしの中でロシア名物‘ボルシチ’と田舎料理に舌鼓を打ちながら、もどかしい日ロ国際交流を楽しんだ。

食堂車とコンパートメントをホームグラウンドに、私たちは、時には親しくなった隣室のロシア人兵士を仲間に引き入れ、朝から晩まで宴会気分を満喫していた。時折停車するローカル駅では、オームリの燻製、サラミソーセージ、ピロシキ、ペリメニ等、ロシアの田舎料理をたんと買い込み、持ち込んだウォッカを煽ってはおだを上げていた。

窓外には、雪原と白禪林が厭きることなく続き、地球を四分の一の一周したにも拘わらず、ほとんど景色が変わらないという信じられないようなロシアの広大な国土にはただ啞然とし、人間の小ささと無力感を感じるばかりだった。しかし、ありあまる時間に倦怠感を感じながらも、ロシア的交流とロシアの食をエンジョイして心豊かに過ごしたシベリア鉄道の旅こそが、慌しい現代世相の中で、「本物の旅」だと感じさせてくれたのである。実際、極寒のモスクワ駅に降り立ったとき、これまでの旅で感じた満足感と充実感とは、確かに一味も二味も違っていた。